

オーストリア・ハルシュタットにおける世界遺産登録地の商品化

ーヨーロッパの世界文化遺産登録地におけるオーバーツーリズムの分析ー

呉羽正昭

筑波大学生命環境系

現在、ヨーロッパに集中する世界遺産登録地では、グローバル化による国際ツーリズムの進展とともに訪問者数が急激に増加している。その結果、オーバーツーリズム、すなわち訪問者の飽和・過剰やそれに伴う諸問題の顕在化がみられる。本研究は、オーストリアのハルシュタットにおけるオーバーツーリズムの実態を解明し、それに伴う諸問題を場所の商品化と関係づけて整理することを試みる。ハルシュタットは、「ハルシュタット文化」や塩鉱山に基づく歴史性、密集木造家屋が湖と周囲の山々と調和した景観に基づいてツーリズムの目的地として成長してきた。世界遺産登録（1997年）後の10年以上の間は訪問者数に増加はみられなかったが、2014年頃から日帰りの訪問者数が急激に増加している。増加に大きく寄与したのは周遊ツアーの中国人で、彼らは中央ヨーロッパに存在する複数の世界遺産登録地を団体バスで訪問する。しかし、近年、騒音、私有地への不法侵入、ドローン飛行などが問題視されている。ゲマインデ（自治体）は、訪問者に地元の人々の静かな生活を尊重するよう求めた掲示設置等によってオーバーツーリズムの解決を目指している。

キーワード：世界遺産、商品化、国際観光、グローバル化、オーバーツーリズム、ハルシュタット

I はじめに

2018年7月現在、地球上で1,092におよぶ世界遺産がユネスコによって登録されている。また、そのおよそ半分がヨーロッパに存在する。さらに、その約9割が文化遺産である。こうした登録遺産のヨーロッパへの集中の背景には、ヨーロッパの歴史性があることは想像に難くない。また、ユネスコ世界遺産の登録に際して、その選考プロセスは国を地域単位としてなされる。それゆえに、小国が卓越するというヨーロッパの地域的特徴が登録数の多さにも影響している。世界遺産の登録地では、その抜群の知名度に基づいて多くの訪問者がみられ、場所の商品化が生じている（松井, 2013）。

ところで、近年著しく進行するグローバル化のもとで世界遺産を有する地域をめぐる状況は大きく変化している。とりわけその変化の原動力として、国際ツーリズムの成長をあげることができ

る。世界の国際観光到着数は1970年には2億人未満であったが、1990年には4億人を超え、2010年の9.4億人を経て2020年には14億人に、さらに2030年には18億人に達すると予測されている（UNWTO, 2016）。とくに到着数、出発数ともに成長が顕著であるのは、アジアである。その結果、ヨーロッパにおいてもアジアからの訪問者数が著しく増加している。オーストリアのみ取りあげても、4地域（韓国、中国、台湾、東南アジア諸国）からの宿泊数は、2010年の60万泊弱から2017年には250万泊を超えるように激増している。ただし、2017年現在で全国の宿泊数に占める割合は1.7%にすぎない。こうした中で、中国人訪問者の多様化（Prayag et al., 2015）、アジア市場内での旅行パターンの差異（Bui and Trupp, 2014）などが注目されてきた。

一方、アジアからヨーロッパへの訪問者数の成長プロセスで生じている目立った現象の一つに、世界遺産への訪問がある。とくに、世界遺産が、

訪問の価値がある目的地から、訪問すべきもしくは訪問しなければならない目的地として認識されるようになってきているように思われる。その結果、世界遺産を有する目的地には、大量の観光者が訪問し、その数が年々増加する傾向がみられる。

類似の現象としては、かつて1960年代や1970年代に地中海沿岸の海岸リゾートのような目的地で生じたマス・ツーリズムがある。一時は深刻視されたものの、結果的には活動の多様化や目的地の分散化を含むオルタナティブ・ツーリズムの成長によって、マス・ツーリズムによる弊害はある程度収束し、あまり問題視されなくなった。ところが、近年、国際ツーリズムの成長によって観光者の過剰が目立つ目的地がみられるようになった。ベネチア、バルセロナ、ベルリン、ドゥブロヴニク、アムステルダム、京都、鎌倉などがそれぞれ、現象自体はオーバーツーリズム *Overtourism* (Seraphin et al., 2018; Preveden et al., 2018 など) と称されている。また、目的地で住民生活を脅かすことも生じるために、観光公害 (高坂, 2018) と表現されることもある。

そこで本研究では、ヨーロッパにおける世界遺産登録とツーリズムの飽和、またオーバーツーリズムの実態を解明し、それに伴う諸問題を場所の商品化と関係づけて整理することを試みる。具体的にはオーストリアアルプスに位置するハルシュタット Hallstatt を取りあげ、世界遺産登録後の観光者の増加とツーリズムの特徴を明らかにするとともに、オーバーツーリズムへの対応を明らかにする。

具体的な分析内容は次の通りである。まず、ハルシュタットの地域的特徴と世界遺産登録前の特徴、世界遺産登録の経緯について説明する (II)。次いで、訪問者の特性と目的地としてのハルシュタットの特性に関して分析する (III)。複数指標でその規模変化の動向を把握するとともに、訪問

者の特徴、バス駐車場の動向、観光関連施設の分布について明らかにする。IVでは、オーバーツーリズムにかかわる諸問題の実態と、それらへの対応について、他地域の事例も交えながら考察する。

II ハルシュタットの地域的特徴

1. 研究対象地域の概観

研究対象地域であるハルシュタットは、オーストリア中央部に位置し、オーバーエスターライヒ州に属するゲマインデ (基礎自治体; 人口778 (2018年)) である (図1)。地名の「ハル」はケルト語の塩に由来し、「シュタット」はドイツ語で場所を指し、まさに塩の場所、岩塩採取地であった (浮田ほか, 2015)。ハルシュタットの名称はヨーロッパの歴史でも重要である。この地で遺跡が発掘されたために、中央ヨーロッパで青銅器時代後期 (紀元前12世紀以降) から鉄器時代初期 (紀元前8世紀から紀元前6世紀) にかけて主流となった文化は、ハルシュタット文化と称される。

ハルシュタットは、ザルツカマーグートの最奥部、ハルシュタット湖の西畔にあり、南にはダツハシュタインの山並み (最高峰2995m) が聳える。ハルシュタット湖は南北に細長い、東西ともに急斜面の山腹が続き、ハルシュタットの中心部は狭い平坦地 (図2) に立地する。鉄道は湖の東岸を通り、ハルシュタット駅から中心部には船で到達する。主要道路は湖の西岸を走るが、1970年代にバイパスが完成し (Gamerith, 2009)、中心部には関係住民と業務用の車輛のみが入れるようになっている。

ハルシュタットは、ザルツカマーグートの最奥部に位置することでも有名である。ザルツカマーグートとは、ザルツブルク市の南東に広がり、大小さまざまな多数の湖、その背後の森林、石灰岩

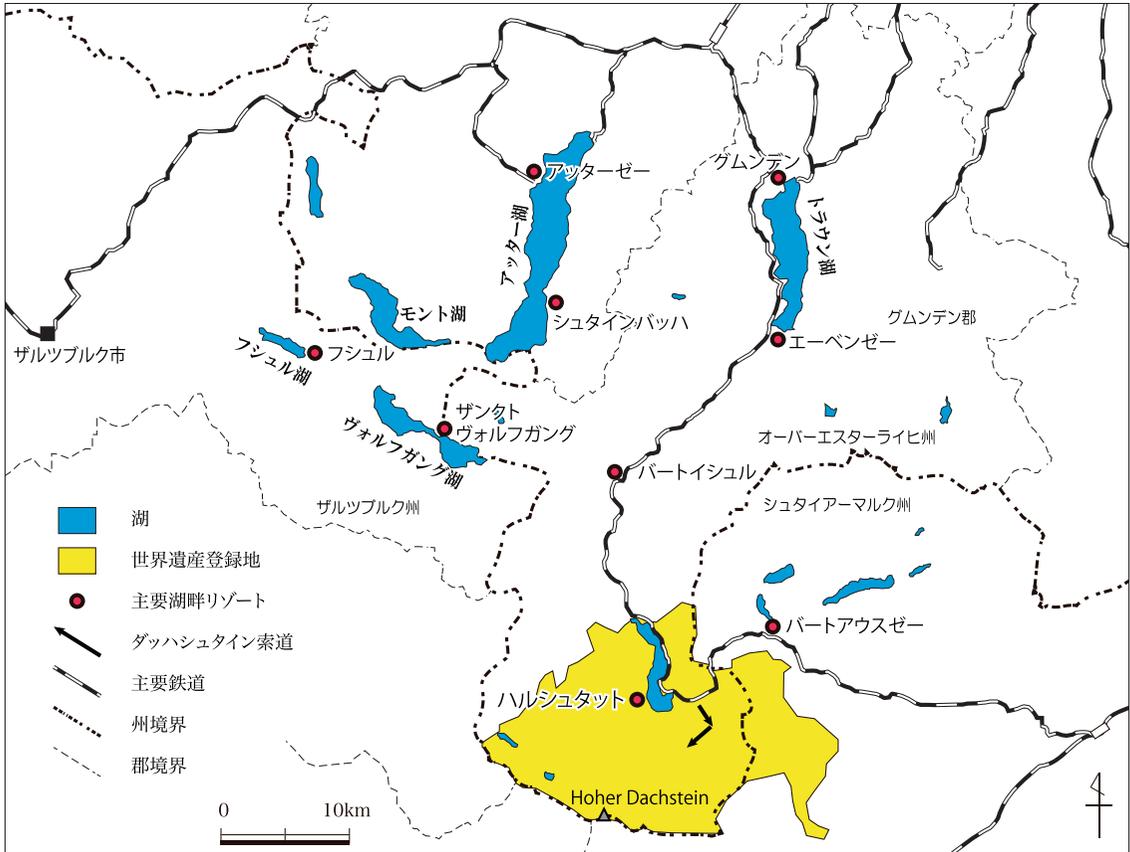


図1 ザルツカマーグートとハルシュタットの概観



図2 ハルシュタットの中心部

(2017年9月撮影)

アルプス、温泉に基づいた観光地域である。歴史的には、そのドイツ語名称「塩の御料地」が示す

ように塩の採掘で栄えた地域であり、その資源としての重要性に基づき、ハプスブルク家の所有地として17世紀から地名になってきた（Gamerith, 2009）。とくに、その中心地のひとつである温泉地バート・イシュル Bad Ischl は、19世紀のフランツ＝ヨーゼフ皇帝による頻繁な訪問でリゾートとして名声を高めた。ハルシュタットもその中でツーリズムへの志向を強めていき、湖畔のリゾートとしての機能を有するようになった。同時に、塩資源が減少しつつあった状況をうけて、すでに1926年に塩鉱山の見学が開始された（Gamerith, 2009）。1960年代に鉱山での塩採取が終了し、その後は完全に博物館化している。

ハルシュタット湖を前景としてプロテスタント教会の尖塔が立ち、背後の急斜面に木造家屋が存在する姿（図3）は、しばしばザルツカマーグート、さらにはオーストリアを代表する景観として評価され、ガイドブックの表紙などに使用されてきた。1980年代頃までは、そうした景観を楽しみ、鉄器時代のハルシュタット文化に触れ、その後の時代に発展する塩鉱山見学をする、さらには背後のダッハシュタイン山地で石灰岩洞窟などを見学する、主として日帰りの訪問者に加えて、夏季に湖や山岳でバカンスを楽しもうとする長期滞在者もみられた。ただし、その受け皿としての宿泊施設の許容量は地形的な制約もあって小規模であり、ベッド数は1970年頃がピークとみられ1,300弱であった。その後は、ザルツカマーグート全体でツーリズムが減退している傾向で徐々に減少し、2017年ではベッド数750となっている。

2. 世界文化遺産の登録

1997年、「ザルツカマーグート地方のハルシュタットとダッハシュタインの文化的景観」がユネスコの世界文化遺産に登録された。文化遺産の登録基準のうち、基準（3）「現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠」および基準（4）「人類の歴史上重



図3 北から展望したハルシュタット中心部
(2018年7月撮影)

要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例」を満たすものとされた。塩鉱山や自然景観、鉱業に基づく文化景観の発展が評価されたのである。登録サイトの核心地域はハルシュタットのほか、バートゴイゼン Bad Goisern, ゴーサウ Gosau, オーバートラウン Obertraun の四つのゲマインデの領域にわたり、その面積は約2.8万haである（図1）。さらに、その周囲の緩衝地域約2万ha（その一部はダッハシュタイン山地稜線の南と東のシュタイアーマルク州にわたる）を含めると、合計約4.8万haに達する。ザルツカマーグートの名称はあるものの、世界遺産登録の領域は、その南部、ハルシュタット湖とのその周囲のみに限られている。

オーストリアは1992年に世界遺産条約を批准し、1996年に「ザルツブルク市街の歴史地区」と「シェーンブルン宮殿と庭園群」が最初の世界遺産登録地となった。ハルシュタットの世界遺産登録はその翌年で、国内では3件目であった。ハルシュタット観光局での聞き取り調査によると、住民や行政は世界遺産登録を希望していたわけではなかった。もともとは、周囲の石灰岩山地や塩鉱山を主とする国立公園への指定を望んでいた。

オーストリアの国立公園指定は、1981年のホーエ・タウエルン Hohe Tauern から開始された。その後1990年代になって、ノイジードル湖 Neusiedlersee やドナウ湿地 Donauauen などと指定が増えており、それと並行してハルシュタットとダッハシュタイン山地の国立公園化が志向された。しかし、その実現が困難であるとされた時期に、オーバーエスターライヒ州の主導で世界文化遺産登録への動きが始まり、結果的に登録がなされた。つまり、世界遺産化の契機は住民の意思でもたらされたわけではなく、当時ザルツカマーグートで宿泊数が衰退・停滞していた状況（呉羽, 2016）を打開するために州政府主導で登録に向け

た政策がなされ、その結果として世界文化遺産登録がもたらされたのであろう。

Ⅲ ハルシュタットにおけるツーリズムの特性

1. 訪問者数の変化傾向

ハルシュタットにおける訪問者は、既述のように、かつては長期滞在者に加えてハルシュタット文化や産業遺産、石灰岩洞窟に触れる学習者がみられた。ただし、今日増加しているのは、世界遺産のみを目当てに短時間訪問する観光者である。

ハルシュタットへの訪問者数の多くは日帰りである。しかし、日帰り訪問者数の規模を示す資料はない。ハルシュタット観光局では年間約90万人の訪問と見積もっている。ただし、どのような推移で増加してきたのかは不明である。それゆえ、ここでは、宿泊施設での宿泊数、バスおよび自家用車の駐車台数、ハルシュタット塩鉱山博物館入場者数、およびダッハシュタイン索道の輸送人員という入手可能な資料を用いて増加傾向を検討する。

宿泊数は、既に指摘したザルツカマーグート全体の傾向と同様に、1970年代前半頃をピークとして停滞・減少傾向にあった。1971年には7.5万であったが、1980年の7.1万、1990年の7.4万と停滞していた。1990年代後半には大幅に減少し(図4)、6万を割るようになり、1997年に世界文化遺産の登録がなされたにもかかわらず、2000年代半ばには年間5万泊を下回った。こうした停滞・減少の期間には、夏半期と冬半期ともに、到着数は停滞している一方で宿泊数が減少している。すなわち、滞在期間が短縮された。しかし、2007年頃から夏半期と冬半期ともに、宿泊数と到着数が大きく増加している。2010年代に入ると、年間宿泊数はかつてのマス・ツーリズム全盛期を上回り、2017年には13.4万泊に達した(表1)。とくに冬半期の増加率が大きい。これは、ハ

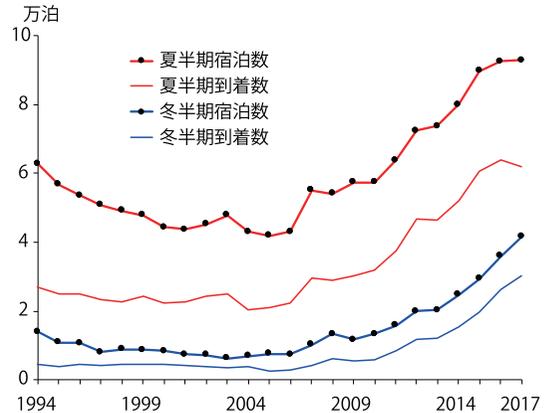


図4 ハルシュタットの宿泊施設における宿泊数・到着数の推移(1994-2017年)

冬半期は表記年前年11月から表記年4月まで、夏半期は5月から10月まで。

(オーストリア統計局 Statistik Austria: Tourismus in Österreich (各年)をもとに作成)

ルシュタット観光局がアジア諸国からの冬半期の誘客に力を入れた結果があらわれたものといえよう。宿泊者の地域別分布については後述する。

次に駐車車両台数の推移についてみる。ハルシュタットにおける訪問者向け駐車場として、後述するように、中心部であるハルシュタット地区の南に位置する、ラーンLahn地区に2カ所の自家用車用、さらにその南東約2kmの地点に団体バス用がある。自家用車用駐車場では、2010年に約5.2万であった駐車台数が、2017年には17万台へと3倍以上に増加した(表1)。夏季のピークシーズンには、正午頃から駐車場が満車となる(図5)。さらに増加の目立つ点が、団体バス駐車車両である。その駐車台数は2010年で約3400であったが、急激に増加して2017年には約16500台に達するようになった。さらに、2018年11月までのデータを参照すると、全ての月で前年の数値を上回っており、継続的な増加がみられる¹⁾。

ハルシュタット塩鉱山は、現在博物館として公開されている(図6)。その博物館は中心部の西

表1 ハルシュタットにおける近年のツーリズム成長

| 年 | ハルシュタットバス駐車台数 a) | ハルシュタット自家用車駐車台数 a) | ハルシュタット宿泊数 b) | ハルシュタット塩鉱山博物館入場者数 a) | ダッハシュタイン索道輸送人数 c) |
|------|------------------|--------------------|---------------|----------------------|-------------------|
| 2003 | | | 53,970 | | 127,204 |
| 2004 | | | 49,975 | | 115,888 |
| 2005 | | | 49,324 | | 111,444 |
| 2006 | | | 50,388 | | 116,842 |
| 2007 | | | 65,314 | | 75,187 |
| 2008 | | | 67,500 | | 138,042 |
| 2009 | | | 69,081 | 91,314 | 119,728 |
| 2010 | 3,440 | 52,533 | 70,818 | 96,673 | 132,399 |
| 2011 | 4,395 | 73,370 | 79,744 | 100,978 | 121,552 |
| 2012 | 4,817 | 71,953 | 92,406 | 105,282 | 126,924 |
| 2013 | 5,992 | 85,066 | 93,946 | 103,265 | 127,986 |
| 2014 | 7,917 | 105,351 | 104,793 | 122,618 | 124,294 |
| 2015 | 10,301 | 122,255 | 119,158 | 136,807 | 145,105 |
| 2016 | 12,776 | 141,133 | 128,573 | 152,213 | 153,805 |
| 2017 | 16,495 | 173,688 | 134,459 | 177,219 | 161,081 |

- a) ハルシュタット村長提供資料。
b) オーストリア統計局 Statistik Austria: Tourismus in Österreich (各年)。ただし数値は表記年前年11月から表記年10月まで。
c) オーバーエスターライヒ州索道ホールディング社 OÖ Seilbahnholding GmbH 提供資料。ダッハシュタイン山域への観光者のほぼ全てが利用するロープウェイ第一路線の輸送人数を示している。2007年には索道更新工事のため9月と10月は休業した。
d) 空欄はデータ未収集。



図5 ラーン地区で満車となった駐車場
(2018年7月撮影)



図6 塩鉱山博物館入り口の施設
(2017年9月撮影)

の山腹にあり、かつての鉱山での作業の様子を坑道内で体験できる。すでに鉱山稼働中の1920年代に訪問者を受け入れていたが、第二次世界大戦後に博物館として本格化した (Mayrhofer und Müller, 2002)。1980年までに訪問者数は順調に増

加して年間10万人となって以降は、2000年までその規模を維持していた。ようやく2013年頃から上昇の傾向を示し、2017年には18万人近くの入場者数を記録した (表1)。ほとんどの訪問者はケーブルカーを利用してそこを訪問する。ケー

ブルカー乗車券と博物館の入場券はセットでも販売されている（30ユーロ；2018年）。これに加えて博物館には入らずに、ケーブルカー終点近隣にある展望台（図7）を目的地とする訪問者数が13万人程度（2017年）存在する。

一方、ハルシュタットの南に位置するダッハシュタイン山地も世界文化遺産の登録された領域である。山域には、隣接するゲマインデであるオーバートラウンの郊外に駅舎があるロープウェイで至ることができる。その第一路線の輸送人員も増加傾向にある（表1）。ただし、2015年からの増加はあるものの、その割合は小さい。山域には鍾乳洞や石灰岩のモニュメント、石灰岩地形の教育ルート、複数のトレッキングルートのほかに、ファイブフィンガーと呼ばれる展望台（図8）がある。

最後に以上の複数指標について、それぞれの変化を相対化して比較してみよう。仮に2012年の数値を100となるように相対化した（図9）。なかでも増加傾向が著しいのはバスの駐車台数であり、5年間で3.4倍になっている。これに次いで自家用車の駐車台数が、同期間に2.4倍となった。それに対して、塩鉱山入場者数、宿泊施設の宿泊数およびダッハシュタイン索道の輸送人員の増加



図7 塩鉱山ケーブルカー山頂駅付近の展望台ワンフィンガー

（2017年9月撮影）

率はいずれも比較的小さい。つまり、オーバーツーリズムの最も重要な要因は、団体バスによる訪問者の増加とみることができる。



図8 ダッハシュタイン山地の展望台ファイブフィンガー

（2016年8月撮影）

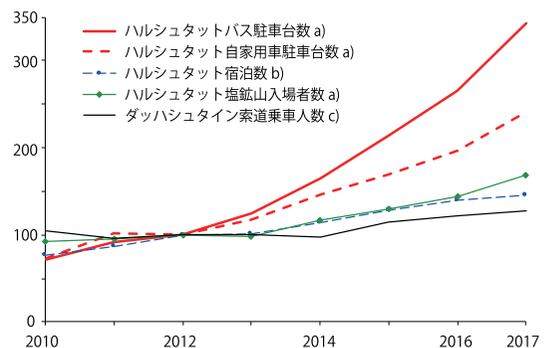


図9 ハルシュタットにおける近年のツーリズム成長に関する指数変化（2010-2017年）

2012年の数値を100とした。

資料：

- a) ハルシュタット村長提供資料。
- b) オーストリア統計局 Statistik Austria: Tourismus in Österreich (各年)。ただし数値は表記前年11月から表記年10月まで。
- c) オーバーエスターライヒ州索道ホールディング社 OÖ Seilbahnholding GmbH 提供資料。ダッハシュタイン山域への観光者のほぼ全てが利用するロープウェイ第一路線の乗車人数を示している。

2. 訪問者の特徴

すでに指摘したように、ハルシュタットへの訪問者の大半は日帰りである。さらに、宿泊者の平均宿泊数は約1.5泊であり（図2）、滞在時間の短い目的地という特徴を有する。ここへの主なアクセスは、団体バス、自家用車、路線バス、鉄道である。2017年の団体バス駐車台数が1.65万台で、平均乗車人数を25人とすればその訪問者数は約41万人となる。また自家用車（17.4万台）利用者の一部は宿泊・滞在するため平均乗車人数をやや少なく2.5人と見積もれば、44万人の訪問者となる。これらに、ザルツブルクなどからパート・イシュルを経由して路線バスや鉄道を利用する訪問者が加わると、先述の観光局の推測のとおり年間でおよそ90-100万人の訪問があると見積もられる。もちろん訪問者数の季節差もあり、団体バス利用者は5・6月にピークがあり、それ以外はほとんど個人訪問者と推測され7-9月の夏季休暇時に多い。ピーク時には1日の訪問者数が7000人に迫るとの報告もある（Süddeutsche Zeitung, 2017）。

訪問者の出発地については、大多数を占める日帰り客に関する資料は存在しない。ここでは、まず出発国・地域のデータがある宿泊数について分析する（図10）。2007年頃には総宿泊数6万のほぼ半分をオーストリアとドイツで占めていた。そのほか、アメリカ合衆国、チェコ、イギリス、ハンガリーと続いており、多様な出発地からの訪問がみられた。このうち、チェコやハンガリーについては、1989年の東欧革命後に増えており、当初は安価な団体バスでのアクセスが卓越していた。こうしたアクセスの増加もあって、後述する団体バスの乗降場ターミナルが整備された。しかし、2010年以降、中国、台湾および韓国からの宿泊数が急激に増えており、近年ではこの三つの出発地域で全体の3割ほどに達する。アメリカに

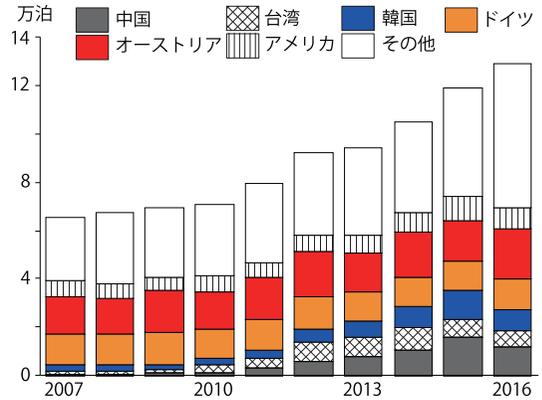


図10 ハルシュタットの宿泊施設における宿泊数の出発地別推移（2007-2016年）

2017年の宿泊数が5000未満の国はその他に含めた。

（ハルシュタット観光局提供資料により作成（原データはオーストリア統計局 Statistik Austria 集計））

ついても増加傾向がみられる。一方でドイツやオーストリア、チェコ、イギリスなどのヨーロッパ諸国からは大きな変化はみられず、一定の規模を維持しているとみることができる。またその他のカテゴリーも増えており、都市観光に類似する性格に基づいて、出発地はますます多様化している。ハルシュタットの宿泊施設規模は小さいため、これらの宿泊者のほとんどは団体ではなく、個人や小人数のグループと推測される。その多くは公共交通機関や自家用車、レンタカー等を利用して訪問している。

すでに指摘したように、近年のハルシュタットにおける急激な訪問者増加をもたらした重要な因子は団体バスである。その利用者の多くは、後述する調査結果のように、中国人である。彼らはパッケージツアーの一部として、ハルシュタットを短時間訪れている。ザルツカマーグート・ツーリズム・マーケティング社幹部との聞き取り調査によると、中国人によるこの傾向は2015年頃以降顕著であり、ハルシュタットに加えて、周囲にある世界遺産登録地（ザルツブルク、ウィーン、

プラハ、チェスキークルムロフ)を周遊するパッケージツアーが多くあり、大型の団体バスや小型のバンで移動しているという。

中国で販売された代表的なパッケージツアーをみると(表2)、11日間のツアーの移動は全て団体貸し切りバスで、毎晩異なった場所で宿泊する盛り沢山の内容である。目的地のほぼ半数は世界遺産登録地となっている。ハルシュタットには8日目、グラーツを出発して約180kmの道程を、一部高速道路を使用して約2時間半で到達することになっている。ハルシュタットでの滞在時間は1時間以上で、家屋景観と自然景観(湖と山岳)の素晴らしさについて、さらには1997年に世界文化遺産に登録されたとの説明がなされている。この日の昼食は各自摂ることになっているので、ハルシュタット中心部で消費がなされていると思われる。その後は約80kmの道のりをザルツブルクに向かう。中国人によるハルシュタット人気の背景には、広東省惠州市博羅県に開発

されたハルシュタットを模した街の存在がある(Süddeutsche Zeitung, 2017)。

ハルシュタットでの訪問者の行動パターンは次のようである。ラーン地区にある駐車場またはバスの乗降ターミナルから、湖岸通りを散策しながら湖畔に映える街並み景観、急斜面に立地する木造家屋の景観を鑑賞している(図11)。また、中心広場や湖畔のレストランで食事を楽しんだり、土産品店を覗いたりしている。中心部にはハルシュタットの自然や文化を学習できる博物館もあるが、その利用者の多くは欧米人である。

ただし、欧米系とアジア系とで行動には違いもみられる。この点は白川郷でも指摘されている(市川ほか, 2016)。それは多くの中国人や韓国人、台湾人に共通する行動としての「撮影」である。訪問者の多さを反映して、その行動が非常に目立っている。家屋景観や自然景観を対象に撮影する場合もあるが(図12)、とくに人物を入れた撮影行動が特徴的である(図13)。重要な撮影場所

表2 ハルシュタットを含む代表的な中国発パッケージツアーの旅程(2018年)

| 日 | 行動・見学場所等 | 滞在時間 | 宿泊地 | 食事 |
|----|---|---------------------------|-----------------|-----------|
| 1 | 上海浦東空港→フランクフルト空港 | | フランクフルト | |
| 2 | フランクフルト(旧市街, マイン川の橋) ヴュルツブルク(旧市街) | 1時間以上 1時間以上 | カルロヴィヴァ リ | 3食 |
| 3 | カルロヴィヴァリ(温泉地中心部) プラハ(旧プラハ城地区, カレル橋) | 1時間未満 1.5時間以上 | プラハ | 3食 |
| 4 | プラハ(旧市街地) チェスキークルムロフ チェスケブデヨヴィツェ | 1時間以上 1.5時間以上 1時間未満 | チェスケブデヨ ヴィツェ | 2食(昼食は各自) |
| 5 | ウィーン(シェーンブルン宮殿) ウィーン(デザイナードアウトレット・パルンドルフ) | 1.5時間未満 2時間 | ウィーン | 3食 |
| 6 | ウィーン(リング通り, シュテファン大聖堂) ブラチスラバ(旧市街, 城) | 1時間未満 1時間未満 | ブダペスト | 2食(昼食は各自) |
| 7 | ブダペスト(英雄広場, 公園, 国会議事堂, 漁夫の誓など) グラーツ(城址, 旧市街) | 1時間以上 1時間以上 | グラーツ | 3食 |
| 8 | ハルシュタット ザルツブルク(城, ミラベル庭園, 旧市街) | 1時間以上 1時間未満 | ザルツブルク | 2食(昼食は各自) |
| 9 | ケーニッヒ湖 | 1.5時間未満 | フュッセン | 2食(昼食は各自) |
| 10 | フュッセン(ノイシュヴァンシュタイン城) ミュンヘン(旧市街) | 3時間以上 1時間以上 | ミュンヘン | 3食 |
| 11 | ミュンヘン空港→上海浦東空港 | | | 1食 |

太字は世界遺産登録サイトを有する目的地を指す。2018年9月出発のツアー料金は16,000-17,000元であった。

(同程旅遊のホームページにより作成 (<https://www.ly.com/dujia/tours/26750.html> cited: 2018/08/24))



図11 ラーン地区からハルシュタット中心部に向かう湖岸通り

(2017年9月撮影)



図13 湖岸通りで民家を背景に人物を撮影するアジア系訪問者

(2018年7月撮影)



図12 中心部広場でプロテスタント教会を撮影するアジア系訪問者

(2018年7月撮影)



図14 中心部北の展望地点で景観を背景に人物撮影するアジア系訪問者

(2018年7月撮影)

のひとつは中心部の北側にあり(図14),そこから南に向かって湖と街のコントラスト,カトリック教会,尖塔の目立つプロテスタント教会,斜面に立地する住宅をみることができる(図3)。こうした撮影の際にドローンを飛ばしたり,撮影のために長時間滞留してその間に大声で話したり,個人の住宅や敷地に侵入したりすることが問題視されるようになった。

一方,ダッハシュタイン山地では,欧米系の訪問者が卓越し,ハルシュタット中心部のように東アジア系の訪問者が目立つことはない。つまり,東アジア系の観光者の多くは,世界遺産登録地の

なかでも著名な場所を求めて訪問していることが指摘される。とくに,母集団の大きい中国人でその傾向が強いものと考えられる。

3. 団体バスの特徴

ここでは,訪問者のアクセスで卓越する団体バスの特徴を説明する。その動向を分析するために,2018年7月28日(土曜日)9時40分から12時20分にかけて,ラーン地区の乗降ターミナル(図15)で観察調査を行った。ここには路線バスのバス停が設けられているとともに,団体バス7台分,自家用車10台分の駐車スペースがある。



図15 ラーン地区の団体バス乗降ターミナル
(2018年7月撮影)

団体バスは、ここで乗客を降ろした後、運転手が駐車ターミナル係員に駐車料金30ユーロを支払う。バスは、およそ10分程度で降車と支払いをした後、約2km南東のバス駐車場（村営）に移動して必要な時間駐車する。さらに利用者の集合時間に合わせてターミナルに戻り、乗車後に出発するというかたちをとる。

調査日約3時間における利用台数は全体で48台であり、そのうち降車が35台、乗車13台であった。このうち、4台は調査時間内に降車と乗車が観察された例である。この4台のハルシュタットでの滞在時間は90分から2時間であり、これがおおよその滞在時間と推察される。乗車のバスで最も早かったものは9時50分前後に出発した（中国人団体）。店舗がほとんど空いていない時間に訪問しており、暑さを避けるための早朝訪問というよりは、周遊旅行のタイトな日程によるものであろう。

まず、降車の35台のみを分析すると、個々の団体バスの利用者数は、正確には把握不可能であったが、1台あたりの人員概数を観察してそれを平均すると、25人弱であった。その利用者の国籍については、バス車輻に貼付されたネームプレートで、または話している言語で判断した。その結果、中国（および台湾）で24台、ヨーロッ

パ系が7（ドイツ、オランダを含む）、日本、韓国、東南アジア、アラブ系が各1台であった。また、ナンバープレートからバスの登録国をみると、ポーランドとチェコがそれぞれ7台、ハンガリーとスロバキア、オーストリアが各4、ドイツが3、クロアチアが2、イタリア、イギリス、オランダ、スペインがそれぞれ1台であった。これらの結果から、中国人訪問者による東ヨーロッパ諸国国籍の団体バス利用が卓越することがわかる。

乗車をした13台についても、降車と重複した4台を除いても同様の傾向であった。つまり、既述のようなバスツアー（表2）による中国人訪問が卓越し、そのツアーでは、安価に済ませるために東ヨーロッパ諸国のバス会社が利用されている。一方、ヨーロッパ系の訪問者は各国の、すなわち、ドイツやイタリア、スペイン、イギリスのバスを利用していた。また日本人の1団体は、オーストリアのバスによる訪問であった。

4. 土地利用と景観

ゲマインデ・ハルシュタットは大きく二つの地区、ハルシュタット地区とその南のラーン地区に分かれている。ラーン地区は平坦地も広く、人口もやや多くなっている。

ハルシュタット地区では、平坦地が湖岸沿いのわずかな面積に限られる（図16）。狭い道路と密集した家屋、さらには斜面上にも展開する木造家屋が景観上の目立った特徴である。湖岸に位置するプロテスタント教会の南西にある広場付近が中心部であり、そこでは4階前後建てで大部分が石造り（またはコンクリート造り）で、一部（テラスや上部階）は木造となっている例が多くみられる（図17）。ここには、飲食店、土産品店、中規模の宿泊施設が密集している。そのほか、役場、博物館、教区事務所などの施設も立地する。プロテスタント教会に隣接する港には、ハルシュタッ

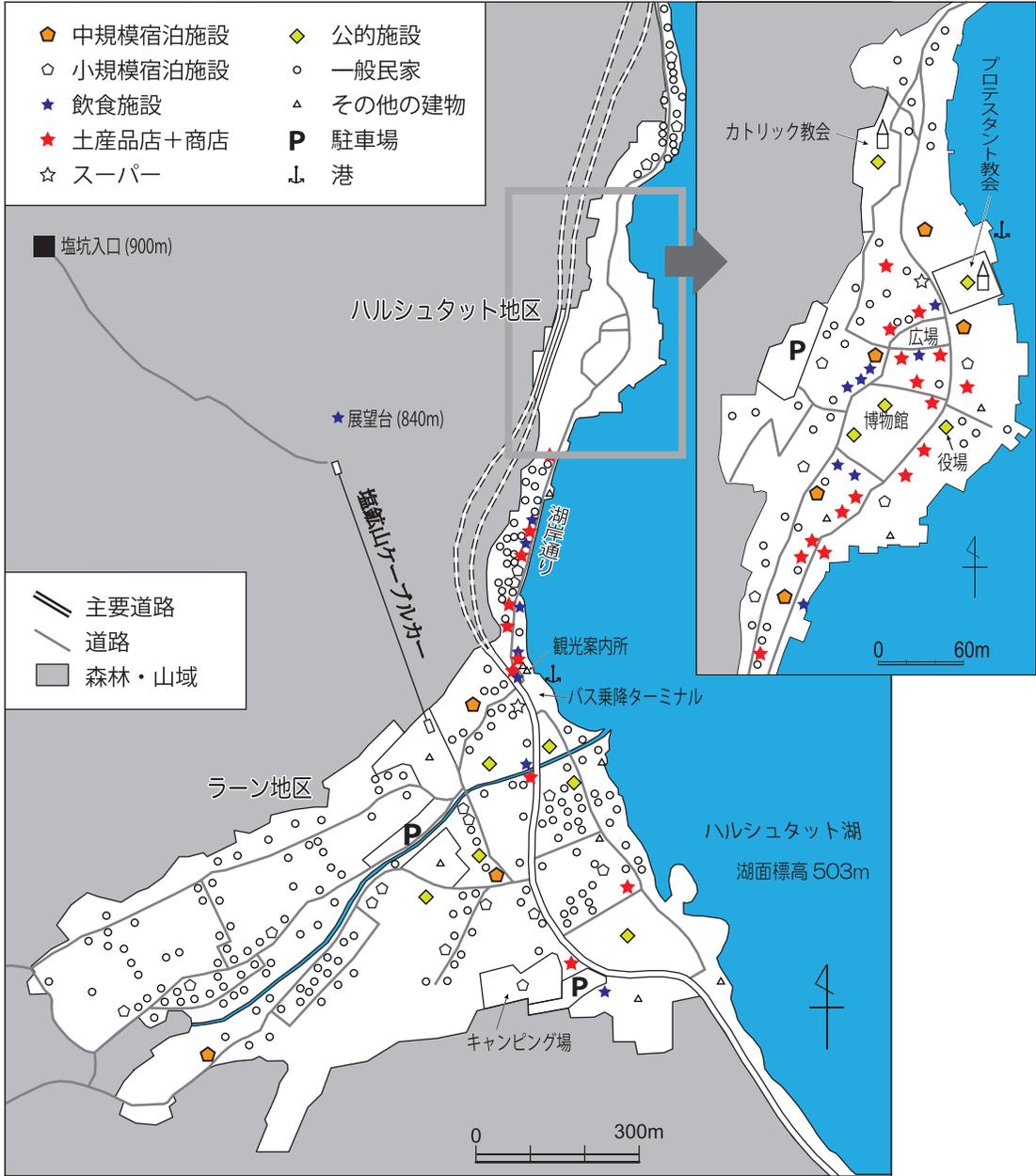


図16 ハルシュタットにおける建物分布 (2017年)

(現地調査により作成 (2017年9月46日))

ト湖対岸にあるハルシュタット駅からの船や湖周遊船が着岸する。一方、山麓は急傾斜になっており、小規模な木造家屋の住宅が密集し、その間を

傾斜のある小径や階段が続いている (図18)。山沿いには、先述したバイパスのトンネルからアクセスできる狭い駐車場があるが、これは居住者専



図17 ハルシュタット中心部の広場
(2018年7月撮影)



図19 土産品店が並ぶ湖岸通り
(2018年7月撮影)



図18 ハルシュタット中心部山麓の木造小規模
民家と小径
(2017年9月撮影)



図20 湖岸通り上部の木造家屋群
(2017年9月撮影)

用となっている。中心部北側では、同様に住宅が湖沿いに立地し、その一部は小規模な宿泊施設となっている。

中心部とラーン地区を結ぶ湖岸道路沿いでは、土産品店と飲食店が多く立地している。土産品店(図19)では、塩や木工工芸品などの販売が中心である。飲食店の中にはファストフードがあり、食歩きする訪問者が観察される。また、小規模な宿泊施設の立地もみられる。その上部には木造家屋が列状に存在している(図20)。

ラーン地区では住宅が卓越する。また小規模

な宿泊施設が分散して存在し、キャンプ場(キャンプカー向け)もみられる。消防署や学校などの公共施設も複数立地している。また、既述の通りハルシュタット中心部への訪問者のバス乗降ターミナル(図15)が地区の北東部にある。そこに隣接して、湖周遊船が着岸する港と観光案内所がある。村営駐車場は2カ所あり、自家用車380台の駐車が可能である。またバス乗降ターミナルから約2km南東に、団体バス用の村営駐車場がある。さらに塩鉱山へのケーブルカー駅があり(図21)、駐車場はその近隣に設けられ



図21 塩鉱山に至るケーブルカー駅
(2015年8月撮影)

ている。中規模のスーパーマーケットがバス乗降ターミナルに隣接して立地し、中国語の看板も設置されている（図22）。店内には、訪問者に土産品として人気の高い地元産岩塩（ミル付き）が目立つようにワゴンに積まれている。

IV 場所の商品化に伴うオーバーツーリズムとその対策

1. オーバーツーリズムと初期対策

ハルシュタットでは、世界遺産登録によって商品化が進んできた。登録以前も訪問者がみられたが、それは湖畔のリゾートとして、また歴史的集落や塩鉱山を学習するために訪問する場所と認識



図22 ラーン地区のスーパーマーケット
(2018年7月撮影)

されていたと思われる。しかし、国際ツーリズムのグローバル化とともに、訪問すべき世界遺産登録地といった評価が非常に強まってきた。つまり、目的地もしくは商品としてのハルシュタットの性格が変化し、場所の商品化はさらに進化した。その結果、訪問者数は著しく増加するとともに、またさまざまな問題が生ずるようになっていく。例えば、交通渋滞、ドローン飛行、路上に散乱するゴミやタバコの吸い殻の増加、話し声による騒音（図23）、カメラ撮影のための居住地侵入（図24）などがある。その結果、住民、とくに観光産業とは関係の薄い住民にとってQOL低下が問題視されている。

その一方で、ハルシュタットでは後継者不足や産業不振といった問題があり、その解決策としての観光産業は重要であり、また不可欠なものでもある。実際には、飲食業や土産販売業、宿泊業といった観光産業部門は、訪問者の増加によって売り上げが増えていることは想像に難くない。それゆえに、オーバーツーリズムをある程度緩和しながらも、今後も一定規模で観光産業を維持することが求められている。

2017年には、住民のQOL低下を防ぐために注



図23 話し声に対して近隣住民が中心部北の展望地点に設置した看板
(2016年8月撮影)



図24 中心部北の展望地点で個人住居に侵入して撮影するアジア系訪問者

(2018年7月撮影)

看板の掲示がなされた。そのひとつは、村長名で4か国語（ドイツ語、英語、中国語、韓国語）でゲマインデの立場と行動規範内容が説明されたもので、展望地点等に複数設置されている（図25）。そこには、住民は何世紀にもわたって形成・維持されてきたこの街に誇りを持っていること、世界遺産であることに誇りを持っていること、それを未来の世代に向けて保全することに力を貸してほしいことといった内容が記載されている。さらにその右半分には、ドローンの飛行は禁止すること、住民と宿泊者のプライバシーを保護すること、ゴミは指定されたゴミ箱に捨て湖には捨てな



図25 ハルシュタット中心部北の展望地点に掲示された看板

(2018年7月撮影)

いこと、住民の許可なしに個人の住宅と庭に立ち入らないこと、不用意にタバコを捨てないこと、個人住宅や宿泊施設、展望地点において休息時間を保護すること（12時から14時、22時から7時までは騒音や会話の音量を小さくすること）が要望としてあげられている。

残りのひとつは中国語と英語のみの短い内容で、設置希望者の住宅に設置されている（図26）。ハルシュタットは博物館ではないこと、訪問中にここで暮らしている住民の生活を尊重してほしいこと、個人宅に侵入しないこと、話し声を小さくすること、ゴミはゴミ箱に捨てること、ドローン禁止といった行動指針が含まれている。

2. オーバーツーリズムへの本格的対策

現在のハルシュタットでは、オーバーツーリズムを本格的に解消するための試みが検討されている。高坂（2018）はオーバーツーリズム対策の具体的な方法として、「分散」「課金」「規制」の三つに整理できることを示し、この順で効果は高まるが訪問者への負担は増えることを指摘した。このうち「分散」についてみると、京都市が導入する、外国人訪問者の集中を時間・季節・空間的に分散させる政策²⁾のうち、ハルシュタットでは空



図26 ハルシュタット山麓民家の入り口前に掲示された看板

(2017年9月撮影)

間的分散は不可能である。また、時間・季節的分散も、自然環境にある程度依存している面もあるために困難である。つまり「分散」は難しいことが前提にある。

それゆえ、重要視されている対策は訪問者の人数を制限することである。検討は主に「ハルシュタット村民の会」Bürger für Hallstattでなされている。そこでの現状把握で問題視されているのは団体バスによる訪問増加である。既に述べたように(表1)、年々増加が続いており、2019年にも前年値を上回ると予測されている。その台数をどのように制限するかが課題となっている。具体的な数値目標とされているのは2014年の台数の数値8,000(表1)であり、これは人口の約10倍の規模である。「ハルシュタット村民の会」ではこの数値が妥当であると判断され、容量「規制」の導入が検討されている。

2018年秋現在、団体バスの台数制限のための方策案として、高坂(2018)による「課金」、すなわち駐車料金の値上げがあげられている³⁾。この案では、駐車料金を現行の30ユーロから2020年を目安に少なくとも150ユーロへと値上げするとともに、その収入増加分を用いて団体バスの利用予約システムを新しく構築することが含まれている。150ユーロの駐車料金は、ベネチア(240ユーロ)やフィレンツェ(360ユーロ)と比較すると法外ではない。

また、団体バスの駐車利用の予約システムについては、すでにザルツブルク市による導入例がある(Salzbürger Nachrichten, 2018)。ここでは、同じく世界文化遺産に登録されている旧市街地では東アジア系の訪問者が激増しており、その付近に立地するバス乗降ターミナルでは混雑が顕著であった。2018年6月から予約システムを導入し、ターミナルの利用台数を管理し、使用の際には予約が求められることになった。事前にインター

ネットで予約し、24ユーロを決裁すると予約票が発行され、割り当てられた時間にターミナルが使用できる。しかし、予約票がなければ70ユーロの支払いが求められる。

さらには、予約システムを導入することで、混雑する時間帯を作らずに訪問者を時間的に分散することも可能となる。こうした事例は、ウィーンにあるシェーンブルン宮殿と庭園群でもみられる(Wolf, 2013)。ここでは、入場券を電子管理して許容量以上の入場を時間的に制限し、10人以上の団体客については予約を義務づけている。さらに空間的な混雑を緩和させるために、訪問者の動線づくりも重視されている。

しかし、現在検討されている団体バスの駐車料金値上げと予約による台数制限がオーバーツーリズム軽減に効果的かどうかは不明である。今後も公認ガイドが実施するツアー導入による入場制限、立ち入り制限区域の設置などの対策も想定されうる。ゴミや騒音、宅地侵入といった、訪問者の意識によって解決される問題については、総量規制よりも訪問者に対する意識改革や異文化理解への方向付けを検討する必要がある。ハルシュタットという、世界文化遺産登録によって商品化された場所で、今後訪問者と持続的にどのように関わっていくのかを真剣に考えなければならない。

V まとめ

本研究は、ヨーロッパにおける世界遺産登録とツーリズムの飽和の実態を解明し、またそれに伴う諸問題を整理することを試みた。具体的にはハルシュタットにおけるオーバーツーリズムの実態を明らかにするとともに、その課題を整理した。その結果は次のようにまとめられる。

ヨーロッパでは世界遺産登録地の集積が顕著である。世界遺産化による知名度向上によって、そ

れらは訪問すべき目的地として認識がなされている。さらに、近年の国際ツーリズムのグローバル化のなかで、中国人や韓国人をはじめとする大量の東アジア系観光者によるヨーロッパ訪問が短期間に急増し、世界遺産登録地を周遊するパッケージツアーの商品化が進んでいる。

ハルシュタットはそうした目的地の典型例である。しかし、ハルシュタット自体は世界遺産への登録を望んだわけではなく、州行政の方針等で1997年に登録された。その後しばらくは訪問者数の増加はみられなかったものの、2010年代に入ってから急激に増加した。そのほとんどは団体バスで訪問するアジア系の訪問者である。とくに、中国国内での模倣地の影響もあって、中国人の間でイメージ形成がなされている。中国で販売されるパッケージツアーでは、ハルシュタットを含む世界遺産登録地が重要な商品内容となっている。ウィーンやザルツブルクなどの世界遺産登録地と組み合わせて訪問可能な位置条件も、訪問者増加に大きく作用している。

しかしハルシュタットでは、その環境規模に基づく訪問受入許容量は小さいものの、それを上回る量の観光者が訪れ、オーバーツーリズムが生じている。また、交通渋滞やゴミ増加の問題に加えて、ドローン飛行や騒音、私有地侵入など訪問者の行動に関する問題が顕在化しており、その結果としてハルシュタット住民のQOLは低下している。それに対して、ハルシュタットでは訪問者に対して住民生活への理解を深めることを促す掲示板を設置した。加えて、オーバーツーリズム解決に関わる重要な点は団体バスの台数制限であると認識し、そのための駐車料金値上げと利用予約システム導入を検討している段階にある。今後も継続的な観察が求められる。

グローバル化で、国際ツーリズムは今後もますます成長することが予測されている。その中

でヨーロッパの世界遺産登録地は、今後もさらに多くの訪問者を受け入れることになる。その際にオーバーツーリズムをどのように克服していくのかについて、訪問者の意識に関する分析も含めて、さらなる研究が必要であろう。

【付記】

研究はJSPS科研費15H01859の助成を受けたものである。現地調査ではゲマインデ・ハルシュタットのScheutz村長、ハルシュタットおよびザルツカマーグート観光協会の方々、Haimayer博士などから貴重なデータ提供とアドバイスを受けた。以上記して感謝申し上げます。

注

- 1) ハルシュタット村民の会Bürger für Hallstattのホームページによる。<https://www.bfhallstatt.at/themen/tourismus/bustourismus-zahlen-fakten/> [Cited: 2018/12/30].
- 2) 京都市産業観光局による「京都観光の現状と取組」が掲載されたホームページによる。https://www.fttsus.jp/spring2018/wp-content/uploads/2018/03/11_1_Makizawa.pdf [Cited: 2018/12/30].
- 3) ハルシュタット村民の会のホームページによる。<https://www.bfhallstatt.at/themen/tourismus/bustourismus-prognose-2019-2020/> [Cited: 2018/12/30].

文 献

- 浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭 (2015) : 『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版。
- 市川康夫・羽田 司・松井圭介 (2016) : 日本人・外国人観光者の観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光。人文地理学研究, 36, 11-28.
- 呉羽正昭 (2016) : オーストリアーアルプスのリゾートとウィーン。淡野明彦編『観光先進地ヨーロッパー観光計画・観光政策の実証分析』古今書院, 117-135.
- 高坂晶子 (2018) : 求められる観光公害 (オーバーツーリズム) への対応ー持続可能な観光立国に向けて。JRIレビュー, 64, 1-27. <https://www.jri.co.jp/file/report/jrireview/pdf/10798.pdf> [Cited: 2018/12/30].
- 松井圭介 (2013) : 『観光戦略としての宗教 長崎の教

- 会群と場所の商品化』筑波大学出版会.
- Bui, H.T. and Trupp, A. (2014): The development and diversity of Asian tourism in Europe: The case of Vienna. *International Journal of Tourism Sciences*, 14(2), 1-17.
- Gamerith, W. (2009): Das Salzkammergut: Die klassische Sommerfrische Wiens und ihre aktuellen touristischen Strukturen. Hitz, H. und Wohlschlägl, H. (Hrsg.): *Das östliche Österreichs und benachbarte Regionen: Ein geographischer Exkursionsführer*. Böhlau, Wien, 369-407.
- Mayrhofer, G. und Müller, G. (2002): Salz als touristischer Faktor: das Salzkammergut. *Geographische Rundschau*, 54(3), 16-20.
- Prayag, G., Cohen, S.A. and Yan, H. (2015): Potential Chinese travellers to Western Europe: Segmenting motivations and service expectations. *Current Issues in Tourism*, 18, 725-743.
- Preveden, V., Mirkovic, G., Gratzner, M. and Schenk, O. (2018): Protecting your city from overtourism: European city tourism study 2018. Austrian Hotelier Association (PDF). https://www.oehv.at/Themen/Presse/Aktuelle-News/Overtourism-Wer-nicht-reagiert,-verliert/Roland-Berger_Osterreichische-Hoteliervereinigung_.aspx [Cited: 2018/12/20].
- Salzburger Nachrichten (2018): Reisebusse in Salzburg: Ab Montag wird gestraft (2018年6月1日記事). <https://www.sn.at/salzburg/politik/reisebusse-in-salzburg-ab-montag-wird-gestraft-28629664> [Cited: 2018/12/23]
- Seraphin, H., Sheeran, P. and Pilato, M. (2018): Overtourism and the fall of Venice as a destination. *Journal of Destination Marketing and Management*, 9, 374-376.
- Süddeutsche Zeitung (2017): Zu schön für diese Welt (2017年8月22日記事). <https://www.sueddeutsche.de/reise/hallstatt-in-oesterreich-zu-schoen-fuer-diese-welt-1.3625376> [Cited: 2018/12/24].
- UNWTO (2016): International tourism trends in EU-28 member states - Current situation and forecast for 2020-2025-2030 (PDF). <https://ec.europa.eu/docsroom/documents/16845/attachments/1/translations/en/renditions/pdf> [Cited: 2018/12/24].
- Wolf, A. (2013): Besucherlenkungsmaßnahmen in Welterbestätten: Das Beispiel Schloss und Park Schönbrunn. Thimm, T. (Hrsg.): *Tourismus und Grenzen*. Verlag MetaGIS-System, Mannheim, 193-204.

Commodification of the world heritage site in Hallstatt, Austria: An Analysis of Overtourism in World Cultural Heritage Sites in Europe

KUREHA Masaaki

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

In Europe, there are many world heritage sites where commodification of the site is causing overtourism through increasing numbers of visitors, an outgrowth of the globalization of international tourism in the recent decade. This study examines commodification of world heritage sites through an analysis of overtourism in Hallstatt in the Austrian Alps. UNESCO designated the “Hallstatt-Dachstein/Salzkammergut Cultural Landscape” as a World Heritage Site (cultural) in 1997. The town of Hallstatt plays a central role in tourism due to its famous history, such as the Hallstatt culture in prehistoric times with its salt mining, as well as its picturesque landscape with tiny wooden houses, lake, and surrounding mountains. While there was no increase in visitor numbers for over ten years after being registered in 1997, the number of one-day visitors began increasing rapidly in the small village around 2014. Visitors are predominantly Chinese, who come by coach operated by an eastern European bus firm as part of a circuit package tour sold in China, and visit various World Heritage Sites in Central Europe. In recent years, overtourism has developed, causing significant problems: noisy chatting, trespassing on private property, operating drones, etc. The Commune has tried to mitigate overtourism by installing signs that ask visitors to respect the quiet lives of the local people, and to understand that Hallstatt is no museum. A group of local people recently tried to solve overtourism by reducing the number of coaches in town through a dramatic increase in parking fees and the creation of a new parking system.

Keywords: world heritage site, commodification, international tourism, globalization, overtourism, Hallstatt